

編集後記

平成最後の『金沢星稜大学人間科学研究』をお届けします。「平成とはどんな時代だったのか」といった振り返りが目立つ近頃ですが、全国的に大学改革が進む中、本学でも名称変更があったり、人間科学部が創設されたりと、昭和から続いた枠組みが変革されました。

2月11日の建国記念の日に、人文学部会・教養教育部会が主催の学術講演会「つながりの比較文化―家族、コミュニティの起源・普遍性から未来を考える―」が開かれ、霊長類社会生態学や人類進化論の権威である山極壽一氏（京都大学総長）の基調講演「ゴリラから見たAI社会」を興味深く聴きました。「人類は環境に適応するため身体を変容させた」「不透明な未来において科学技術は安全を与えるが、安心は人間が与えるもの」「安心とは幸福。幸福とは人と人とのつながり」等のご主張は、自ら熱帯雨林に棲むサルやゴリラの生態や行動を観察された記録に基づきます。

「つながり」といえば、未来を生きる幼子にとって最も安心できる存在は親のはず。食べ物を分ち与える霊長類の家族形態からして当然のようですが、例外もあります。それは、社会問題となっている様々な「child abuse―チャイルド・アブ्यूズ―子ども虐待」です。

厚生労働省 HP には、「全ての子どもは、『児童の権利に関する条約』の精神にのっとり、適切な養育を受け、健やかな成長・発達や自立が図られることなどを保障される権利があります。子どもの健やかな成長に影響を及ぼす児童虐待の防止は社会全体で取り組むべき重要な課題です」と謳われていますが、幼児が犠牲になる痛ましい事件は後を絶ちません。

千葉県野田市の小学4年で10歳の栗原心愛みあさんが自宅浴室で死亡し、父親が傷害容疑で逮捕された事件は、社会に衝撃を与えました。学校や行政の対応の不手際が問題視されていますが、人間科学の視点から「暴力」について解明する必要があると考えます。前出の山極壽一氏『暴力はどこからきたか―人間性の起源を探る―』（NHK出版、2007年）、「第五章 暴力の自然誌―子殺しから戦争まで」では「人間の社会に起こる暴力や幼児への虐待は、類人猿とは比べものにならないくらい多様で複雑な人間関係が原因である」と洞察されています。

今号は、こども学科12件、スポーツ学科2件、教養教育部1件、合計15件の投稿がありました。どうぞ高覧ご批正くださいますよう、宜しく願い申し上げます。

2019年3月吉日

編集委員長 馬場 治

《投稿された論文等に関する著作権は基本的に人間科学部に帰属します》
「金沢星稜大学学会 会則と規程等」については下記 WEB サイトの閲覧をお願い致します。

<http://www.seiryu-u.ac.jp/u/education/gakkai/research02.html>

金沢星稜大学人間科学研究 第12巻第2号
(通巻第23号)

平成 31 年 3 月 11 日 印 刷
平成 31 年 3 月 12 日 発 行

発 行 金沢星稜大学学会人間科学部会

〒920-8620 金沢市御所町丑10番地1
TEL (076) 253-3984
FAX (076) 253-3998

印刷所 ソノダ印刷株式会社

〒921-8161 金沢市有松4-3-26
TEL (076) 247-5157

金沢星稜大学学会人間科学部会

部会長 奥田鉄人

編集委員 馬場 治(委員長)

阿羅功也 天野佐知子